

## 韓国・釜山市甘川における文化村の展開と観光

## The Tourism and Development of Culture Village in Gamcheon, Busan, Korea

鄭 玉 姫\*  
JUNG, Okhee

**Abstract:** This paper analyzes public art projects and their effect on tourism in Korea. Additionally, this study investigates the evolution of villages and the growth of tourism through the promotion of public art projects. Public art projects have been conducted by the Korean government since 2009 for regional revitalization and include the display of works of art in hillside road areas. The area of study is Gamcheon village in Busan city, Korea. Gamcheon village was initiated by a public art project in 2009 and has installed a variety of artworks and murals. Gamcheon Culture Village is currently managed by a “residents’ committee” established in 2013. The village received 300,000 domestic and foreign tourists in 2013. An increase in tourists to the village has contributed to commercial activities such as restaurants, souvenir shops, and an information center; however, residents’ privacy concerns, noise, and garbage problems have also increased. The residents’ committee must overcome these problems in the future growth of Gamcheon Culture Village as a tourism destination.

**Key words:** パブリックアート (public art), 甘川文化村 (Gamcheon Culture Village), 山腹地域 (hillside area), 住民協議会 (residents’ committee), 釜山市 (Busan city)

- I はじめに
- II 釜山市沙下区甘川集落の地域概観
- III 甘川集落のパブリックアートプロジェクト
  - 1) 甘川集落におけるパブリックアートプロジェクトの推進
  - 2) 甘川文化村運営体系
- IV 甘川文化村における観光の進展
  - 1) 観光客の客層と行動形態
  - 2) 地元住民と甘川文化村
- V おわりに

## I はじめに

韓国では2005年よりパブリックアート及びパブリックデザインに関する認識が高まりはじめ、2006年には文化体育観光省によって老朽化地区の生活環境改善を目的とする“Art in City”事業が推進されるようになった。2009年には、2008年下半年以降世界景気と美術市場の景気とが同時に沈滞していくなか、アーティストたちの厳しい生活状況を背景とし、芸術分野の雇用創出と低所得層の住宅環境の改善を目標に掲げるパブリックアートプロジェクト<sup>1)</sup>が推進された。特に、同プロジェクトの実施対象地には低所得層密集地域が設定されたため、韓国政府や地方自治体はパブ

\*立教大学観光学部・助教

リックアートプロジェクトによる地域環境改善を期待した（文化体育観光省，2013：175-176）。

2009年以降、パブリックアートプロジェクトの推進にともない、文化村が全国55カ所に造成された。具体的には、ソウル市をはじめ釜山市、光州市、京畿道、慶尚道、済州道などである（文化体育観光省，2013：175-178）。プロジェクトが推進される該当地域では、地域の環境改善と愛郷心の増進、観光などを文化村造成の目的としている（白ほか，2014）。こうしたなか、観光を推進目的に掲げる文化村の住民にとってのパブリックアートの価値は、集客のための住民組織の活動や商業施設の運営などで受けられる経済的恩恵である。これに対し、観光客が文化村に見出す価値は低所得層密集地域とアートが醸し出す独特な景観を満喫したり、ひいては地域景観の保存に貢献したりする行動にある。

実際のところ、文化村の地域住民にとってアート作品制作、土産品売場運営などといったパブリックアートプロジェクト活動そのものは低収益である。しかし、観光客との交流をとおして地元が再認識されたり商業が活性化したりするといった利点があるため、低所得層密集地域における地域活性化が大いに期待される。したがって本研究は、パブリックアートプロジェクトの推進による文化村の展開に着目しつつ、地域住民の組織運営と観光の状況に注目することとする。

パブリックアートに関する既存研究の傾向をみると、①パブリックアートによる地域への影響をプロジェクトの推進過程と地域での組織活動から包括的に分析したもの（白ほか，2014）、②パブリックアートをとおした低開発地域の現状の改善について都市再生の観点から論じたもの（イ・イ，2012）、パブリックアートの推進による地域再生とは地域の有するアイデンティティの確立につながるべきであると強調したもの（ソン・ベン，2013）、③パブリックアートの成功要因を官・民・産・学の運営構造と財源確保という文化政策的側面から分析したもの（チョン・アン，2011）、④パブリックアートプロジェクトの推進において行政主導ではなく地域住民やアーティストが能動的に参加できる体制づくりの必要性を指摘したも

の（ホン，2011）がある。

パブリックアートを観光の観点から論じたものとしては、キム（2011）がマーケティング側面から、パブリックアートが推進された地域を対象にしてより多くの観光客を惹きつけながら持続的な発展を志向するための地域運営のあり方についてまとめた。このような持続的な発展には、プロジェクト実施後にも継続的な事後管理体制と観光的ストーリーテリングが必要であるとパク（2013）は説明し、これらが地域の悪いイメージの改善につながると付け加えた。以上から明らかなように、パブリックアートの展開を住民組織活動ならびに地域住民と観光客の相互関係にまで踏み込んで分析した研究はまだ見当たらない。

本研究の目的は、新たな観光資源としてのパブリックアートを取り上げ、そうした運動を担っている住民組織と観光客の行動、地域の観光地化に対する住民の反応に基づき、文化村の展開と観光の状況を把握することである。本研究では、釜山市甘川文化村を事例に選んだ。甘川文化村は行政区画としては釜山市沙下区甘川2洞に位置している。甘川2洞では2009年よりパブリックアートプロジェクトが推進され、集落内には芸術作品が設置され、壁絵が描かれた。現在、甘川文化村は多くの人が訪れる釜山指折りの観光スポットとなっている。

本論文作成のために、甘川文化村に関するニュースや新聞記事の収集、住民へのインタビュー調査、集落内景観調査を実施した。

## II 釜山市沙下区甘川集落の地域概観

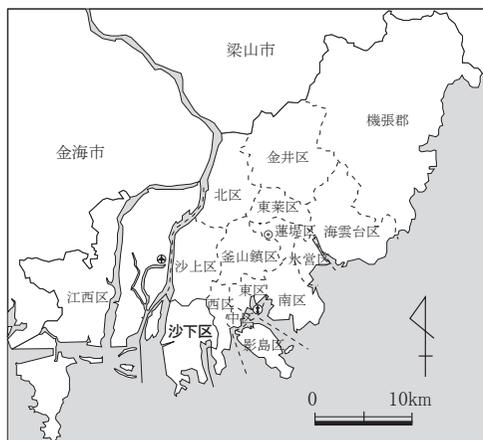
甘川文化村が含まれる沙下（サハ）区は、落東江の河口、釜山市の西南端に位置し、甘川2洞は沙下区の東南に位置している。甘川2洞（以下、甘川集落と表記）の地形は、東西を天馬山（324m）と玉女峰（226m）に挟まれ、南方には甘川港が広がっている。甘川集落は山服に立地し、一般的には低所得層密集地域とされる。甘川集落には、地下鉄1号線土城（トソン）駅よりバスに乗って10分で到着する。南浦洞繁華街とも近く、釜山中心部を訪れる観光客にとっても交

通の便はよい。

住民の生業は、住民への聞き取りによると、建設現場での日雇いや工場勤務が多く、これは以前から同様である。かつて冬季には、市外に出稼ぎに行く人も多かったという。甘川集落は、2013年現在の世帯数が4,268戸で、人口は9,249人(男性4,827, 女性4,422)である。そのうち、65歳以上の高齢者が21.5%を占め、高齢化が進行し

ていることがわかる。甘川集落の人口はこの10年間で34%<sup>2)</sup>減少しており、急激な人口の減少、とりわけ若年層のそれは、集落における高齢者の増加につながっている。こうした現状から、比較的不安定な経済状況にある住民たちにとって新たな収入源となりうる経済活動が求められているといえる。

甘川集落は趙哲済が設立した民間信仰の「太



a. 釜山市の区・郡区分



b. 沙下区の洞区分



c. 甘川2洞の地形概観

図1 研究対象地域

極道」が信仰される村として知られ、その形成は1950年代までさかのぼる。忠清道をはじめとする韓国全土の太極道の信徒たちが朝鮮戦争（1950～1953年）をきっかけに釜山宝水洞などで避難生活をしてきた。その後、1955年から1960年代初期にかけて甘川集落に彼らが集団移住<sup>3)</sup>してきたことにより、太極村と呼ばれるようになったという。当時、海拔200～300mの山腹斜面に1,000余りの板ぶき家が建てられた<sup>4)</sup>。

軒の低い小家屋が入り込んだ路地に沿って密集しており、甘川集落の周辺景観は山腹斜面に建ち並ぶ階段式集団住居といった趣きである。家屋の間取りは、台所と部屋に分けられ、後者は1室または2～3室がほとんどである。観光案内所「小さな博物館」に展示されている1950年代の甘川集落の写真を見ると、路地沿いに家屋が密集して立ち並んでいることと、家屋に比べて太極道の集会所がはるかに大きいこと、屋外設置の共同トイレと井戸などが確認できる。敷地面積が狭くて屋内トイレを設置できず、現在でも共同トイレ（40個）を使用する世帯が500戸にのぼる<sup>5)</sup>。

### Ⅲ 甘川集落のパブリックアートプロジェクト

#### 1) 甘川集落におけるパブリックアートプロジェクトの推進

甘川集落における文化村造成の始まりは、2009年に文化体育観光省主催の公募事業「パブリックアートプロジェクト」に、地元芸術団体「art factory in DADAEPO」が甘川集落を対象地<sup>6)</sup>にした「夢をみる釜山のマチュピチュ」という企画を応募、選定されたことである。このプロジェクトの実施によって、集落内道路の一带に10点の造形作品が設置された。作品制作はアーティストを中心に地元小学生と地域住民の協力を得て行われた。

2010年には、文化体育観光省によって空き家プロジェクトや路地再生プログラム、「迷路美路」プロジェクトが推進された。空き家プロジェクトは、空き家の再生を目的とする家屋づくりプロジェクトである。プロジェクトの結果、アーティ

ストの作品を展示したギャラリーが6つ誕生した。これがきっかけとなって移住してきたアーティストが現在5人いる。彼らは沙下区指定の居住アーティストとして住民に作品作りを教えながら芸術活動をしている。甘川集落には2012年現在217<sup>7)</sup>もの空き家が散在しているため、プロジェクトによる空き家の活用に関心が集まっている。また、韓国語で「ミロミロ」と発音される「迷路美路」プロジェクトは路地の保存・再生を目的としている。実際に、観光客が道に迷わないよう、主な観光コースに魚の形をした矢印を建物の壁等にかけている。これらの作品によって集落の雰囲気が一変された。

2012年に甘川文化村は文化体育観光省主催のパブリックアートプロジェクトに再度選定された。これは、2009年と2010年にかけて同プロジェクトに選定された約40カ所の地域のうち、プロジェクトの波及効果と発展の可能性が高いと評価された地域（4カ所）を改めて支援するという趣旨による。文化体育観光省は支援額を2009年の1億ウォンから1.2億ウォンに引き上げ、プロジェクトの規模と質を上げることを目標に掲げた（文化体育観光省、2013：177-178）。このことにより、甘川文化村にはさらに10点の造形物が設置され、プロジェクトの成功事例として一層知られるようになった。

#### 2) 甘川文化村運営体系

図2は、甘川文化村の運営体系を示したものである。これによると、現在、甘川文化村の運営は住民・行政・専門家・アーティストのコミュニティによって行われている。このうち、甘川文化村の運営に密に関係しているのが、住民共同体「甘川文化村住民協議会」である。

社団法人「甘川文化村住民協議会」（以下、「甘川住民協議会」と表記）は2013年に文化村の運営を目的に設立された。パブリックアートプロジェクトを推進すべく、2010年11月に結成された「甘川洞文化村運営協議会」<sup>8)</sup>が前身である。2014年現在、会員数は120人であり、運営委員会は会長、副会長、監査、運営委員の25人<sup>9)</sup>からなる。会員募集は定期的に公式ホームページ上

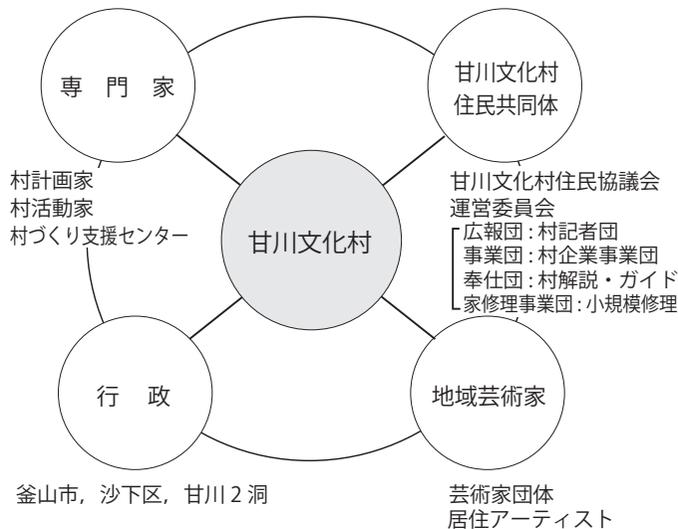


図2 甘川文化村運営体系 (2014年)  
(甘川文化村ガイドマップ2014より作成)

での呼びかけ、集落内に垂れ幕を吊るすなどして行われている。

運営委員会は、広報団、事業団、奉仕団、家屋修理事業団の4つに分かれている。広報団は甘川村新聞の発行、事業団は飲食店などの運営、奉仕団は観光客向け集落案内、家屋修理事業団は小規模家屋修理などを担当している。なかでも、事業団は、カフェ、食堂、アートショップ、土産品売場、駐車場の管理のために5つの事業所を経営し、経済活動を行っている。これらの事業所は地元住民が経済利益をもとめて行う活動として釜山市より「村企業」に指定され、雇用創出の名目で人件費が補助されている。「村企業」運営による収益金は、「甘川住民協議会」と各施設の運営費、祭り等行事にかかわる費用、事業安定化のための積立金に充てられる。また、甘川文化村の長期的発展と地元住民の生活環境の向上を目的とした後述の利益還元にも使われる<sup>10)</sup>。

上記のように、2009年より甘川文化村ではパブリックアートプロジェクトが推進された結果、2013年12月現在、観光案内所やギャラリー、土産品売場、居住アーティストの作業場などの施設が22カ所、造形物、壁画などの作品が33カ所に設置されている<sup>11)</sup>。また、甘川文化村の運営のた

めに住民組織も設立され、多様な活動に取り組んでいる。低所得者層密集地域甘川文化村の劣悪な居住環境は、芸術作品設置、生活基盤整備により改善されつつあり、大勢の人が訪れる観光地へと変わってきている。

#### IV 甘川文化村における観光の進展

##### 1) 観光客の客層と行動形態

かつて、甘川文化村には、地元住民を対象とするスーパーマーケットと2～3軒の食堂が営業しているに過ぎなかったが、2014年10月現在、食堂をはじめとして土産品売場やカフェなど、36の商業施設が存在する<sup>12)</sup>。さらに、5カ所の観光案内所も含め、これらの観光関連施設は主に集落の主要道路沿いに設けられている。

2011年から2013年の3年間に甘川文化村を訪れた観光客数は、毎年それぞれ約2.5万人、9.8万人、30.5万人であり、著しい増加を示している。2013年には3.1万人の外国人観光客が訪れており、この数字は総観光客数の10%に相当する<sup>13)</sup>。今後とも観光客の増加が期待される。

ここでは、観光客の客層と行動形態について述べる。まず、主要客層については20代前半の大

学生が多い<sup>14)</sup>。甘川文化村はブログや SNS によく登場するスポットでもあるため、インターネットに親しんでいる彼らにとって訪れたい場所になっていることがうかがえる。観光客の訪問時期をみると、夏季が目立つ。これは、釜山の海水浴場を訪れた観光客が甘川文化村も日程に組み込む傾向があるからである<sup>15)</sup>。加えて、外国人観光客も多くみられ、日本や台湾などのアジア圏に加え、アメリカとヨーロッパからの観光客も増えつつある<sup>16)</sup>。釜山市は英語や日本語、中国語による応対が可能な「文化観光解説員」を派遣し、彼らが外国人の集落案内に当たっている。

次に、観光客の主な行動は、集落の至る所に設置されている造形物や、壁画、空き家プロジェクトの作品を周遊することである。特に、観光案内所で甘川文化村ガイドマップを購入し、それを手に取って集落内を歩く人が多い。ガイドマップには作品と写真撮影スポットの設置場所が示され、6カ所の写真撮影スポットや人気のある造形物の周辺には写真撮影の順番待ちの列ができる。

観光客の増加にともなって、2011年より沙下区主管「甘川住民協議会」の主導で路地祭りが開催されている。路地祭りに際しては集落の主要道路沿いに天幕が設営され、そこでは甘川文化村のアーティスト工房や地元特産品などの宣伝、作品の販売が行われる。また、それ以外の催しも盛り沢山に用意され、観光客と地元住民が共に楽しむ祭りとなっている。3年目を迎えた2013年の路地祭りの3日間の期間中には、国内外より約3万人の観光客が訪れたという<sup>17)</sup>。

## 2) 地元住民と甘川文化村

老朽不良住宅地域であった甘川文化村は、年間30万人の国内外観光客が訪れる観光スポットへ変わってきている。パブリックアートプロジェクトの推進にともない観光客が増え、さらに観光関連施設の増加によって集落内の商業は活性化して、集落の雰囲気は一新された。

ところが、観光客が増えるとともに住民側からは、騒音やプライバシー侵害、ゴミ問題などに関して多くの苦情が出されつつある。最近、週末になると平均2,500人<sup>18)</sup>を超える観光客で集落内

はごった返しとなり、住民たちは一日中騒音とゴミのポイ捨てに悩まされる。また、以前までは夏になると玄関や窓を開けブラインドタイプのカーテンをかけて生活していたが、現在では路地を歩き来する観光客が多くなったせいでそれもできないようである。さらに、室内の間取りを気にする観光客が、勝手に玄関を開ける場合もあり住民たちの不満はますます高まっている<sup>19)</sup>。

以上のような問題を解決するために、「甘川住民協議会」は観光客側と住民側のそれぞれに対応している。まず、観光客側には集落内で守るべきマナー事項を広報している。たとえば、注意事項を記した案内板を多くの観光客が回るコースごとに掲げたり、甘川文化村ガイドマップやホームページにも同様の注意事項を掲載したりしている。案内版の内容をみると、「住民のための居住空間です。プライバシー侵害にならないよう、静かな移動をお願い申し上げますとともに、ここでの写真撮影はご遠慮ください」と記されている。また、集落訪問時間<sup>20)</sup>を午前9時から午後6時までとし、地元住民の生活環境を守るために観光客の訪問を制限している。このような問題は、居住地から遠隔な観光地とは異なり、居住空間が観光地化された地域<sup>21)</sup>でしばしばみられる(近藤, 2006)。こうした観光地の特色を認識した上で、観光客のマナー向上が求められている。

住民側に対し、「甘川住民協議会」は、「村企業」運営による収益金をいわゆる還元事業に回して、観光客に対する住民側の不満の解消に使っている。たとえば、家修理事業団による家屋修理があげられる。甘川集落には18統(統は日本の町目にあたる)があり、毎年各統の長より修理希望の家屋5棟からの申請が出され、家屋修理が行われている<sup>22)</sup>。また、集落内17カ所の高齢者施設にコーヒー、トイレトペーパーなどの品物を寄贈したり<sup>23)</sup>、2014年2月の韓国節句には食用なたね油を全世帯に配布したり<sup>24)</sup>した。

次に、観光客が増加している状況に対する住民側の受け止め、また、外部による店舗経営に対する住民側の反応について述べる。ここには、住民側の甘川文化村運営に対する意識が表れていると考えられる。

まず、筆者の聞き取りによると、甘川文化村の観光地化に対する住民側の意見は3つに分かれた(表1)。具体的には、観光客と観光関連施設が増えたことを良いとして満足する住民、それに不満を示す住民、自分は知らないと無関心な住民である。満足を示した住民はたいてい40代、もしくは60～70代であり、無関心なのは主に50代で、不満を示した住民は30代であった。

表1より個々の意見をみてみると、甘川文化村の観光地化に対する満足を示した70代の住民は、「経済的な面よりも多くの人たちが甘川文化村を訪れてくれるだけでもありがたい」と述べ、同様に満足を示した40代のファッションタトゥー店舗経営の男性は、開業を契機に釜山市内より甘川文化村に引っ越ししてきている。この男性は甘川文化村の観光地化に対する肯定的反応の代表的事例である。次に、無関心を示した50代の工場勤務の男性は、「多くの人を訪れることで集落がうるさくても別にどうでもいい。人が多くなった以上、それは当然だ」と語った。最後に、不満を表明した30代の会社勤めの女性は、「観光客がたくさん来て、とにかくうるさく、交通渋滞も深刻で大変不便だ」という。さらに、「観光客による被害は住民たちが受けているが、外部からの経営者による店舗が多くなると、実際の利益は甘川集落外に流れてしまう」と不満げに述べている。これは、最近、甘川文化村において外部からの参入による店舗経営の割合が高くなっている実情<sup>25)</sup>を反映した意見である。そこで、女性は自宅の一部を改修してアクセサリー店をオープンした。以

上により、甘川文化村の観光地化に対する住民側の反応は、職業と年齢に大きく影響されるとともに、自分が文化村運営に参加し経済的収益を得られるかどうかによると推測される。

以上のように、甘川文化村の有する元々の地域経済が小規模であるため、地元住民の間では、多くの外部からの経営者による店舗経営が新たな経済構造を生み出すことへの違和感が生じている。その一方、「甘川住民協議会」は、甘川文化村における住民側の生活空間と観光客の観光空間との折り合いを求め、観光客向けには注意喚起の案内板を設置し、地元住民に対しては利益の還元を行っている。

## V おわりに

本稿は、釜山市甘川文化村を事例として、韓国におけるパブリックアートを取り上げ、関連プロジェクトの推進による文化村の展開とそれにとまなう観光の状況を明らかにすることを試みたものである。

甘川文化村では、2009年より韓国文化体育観光省主管のパブリックアートプロジェクトが推進され、集落内はアート作品が設置されたり、壁絵が描かれたりしており、これらの作品が観光客を引き寄せている。2013年には甘川文化村の運営のために住民共同体「甘川住民協議会」が設立された。「甘川住民協議会」は経済活動を目的として5カ所の事業所を経営しており、甘川村新聞の発行、観光客案内、家屋修理などにも積極的に取り組んでいる。こうして甘川文化村はパブリックアートプロジェクトの成功事例として知られるようになり、年間30万人の観光客が国内外から訪れる観光スポットへと変わってきている。

一方、観光客の増加にとまなない、観光客向けの食堂や土産品売場、観光案内所の開業が相次ぎ、集落内の商業は活性化しているものの、住民生活にはプライバシー侵害や騒音、ゴミ問題等の悪影響が及んでいる。そのため、「甘川住民協議会」は観光客向けに集落内で守るべきマナー事項を広報しており、地元住民には事業所運営による利益を還元して観光客に対する住民側不満の解消を

表1 釜山市甘川集落の観光地化に対する住民側の意見

No	年齢	性別	職業	意見
1	30代	女	会社勤務	不満
2	40代	男	自営業	満足
3	50代	男	工場勤務	無関心
4	50代	女	工場勤務	無関心
5	60代	女	無職	不満
6	70代	男	無職	満足
7	70代	男	無職	満足

(2014年11月の聞き取り調査より作成)

図っている。このような対応は、生活空間と観光空間が共存する甘川文化村が、今後とも観光地として成長していく上でますます重要視されることであろう。

甘川文化村の展開は、行政側の支援に与るところ大であったことは否めない。行政側による継続的な支援があったからこそ、多様な芸術作品が設置され、「甘川住民協議会」も積極的に甘川文化村運営と収益性のある事業運営に取り組むことができた。しかし、行政の公共事業による資金援助はいつまでも続く訳ではない以上、「甘川住民協議会」の組織運営が自律性を持たないかぎり観光地としての甘川文化村の持続は困難であると筆者は考える。そのため、「甘川住民協議会」は経済的成果の得られる活動を継続して追求することが大切であろう。引き続き、甘川文化村とともに「甘川住民協議会」の活動に注目したい。

## 謝 辞

現地調査においては甘川文化村の住民の皆様にお大変お世話になりました。特に、「甘川住民協議会」のシン・ヨンオク氏には同協議会の設立当初から現在までの経緯について説明していただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

## 注

- 1) 韓国のパブリックアートプロジェクトは、1930年代にアメリカ連邦政府がニューディール政策の一環として実施し大きな成果を収めたパブリックアートプロジェクト (public works art project) にヒントを得たものである。実際のところ、本来、アメリカのパブリックアートプロジェクトは経済浮揚効果を志向するのに対して、韓国のそれは、文化になじみが薄い地域に事業を実行することによって、文化を享受する階層を増やしていく趣旨で行われた。「美術と批評」<http://artcritic.kr/100203552457> (最終閲覧日：2014年10月8日)
- 2) 甘川集落の人口は、2003年には14,019人 (男性7,216, 女性6,803) であった。「沙下区統計年報」[www.saha.go.kr](http://www.saha.go.kr) (最終閲覧日：2014年10月20日)
- 3) 本来、釜山宝水洞に本部が所在していた極道信仰村の住民が甘川へ集団移住した理由は、1953年1月の国際市場大火災、1953年11月の釜山駅舎大火災など次々と起きた火災である。当時、韓国政府や釜山市、市内の建物所有者は連続して起きた火災の原因を出火元の板ぶき家であると判断し、1954年より本格的に板ぶき家の撤去に取り組んだ。そのとき、移住先候補には釜山影島区があげられたが、移住予定地が傾斜地であり、土地も大半が私有地である等の事情により度重なる話し合いを経て、現在の甘川集落への集団移住が決まった。
- 4) 「甘川文化村ホームページ」<http://www.gamcheon.or.kr/> (最終閲覧日：2014年10月8日)
- 5) 朝鮮日報2013年6月17日付
- 6) 「art factory in DADAEPPO」は、2009年2月より西区南富民洞、中区榮州洞、影島区影善洞など山間道路周辺に立地する各地区を対象にしてプロジェクト事業への公募を呼びかけた。そのなかで、最も住民側の反応がよかった甘川集落が対象地に選定された (釜山日報2009年9月16日付)。
- 7) 甘川村新聞 vol.3 2012年10月発行
- 8) 2010年2月に沙下区役所の支援を受け、地域の住民代表5人と文化芸術系専門家5人、該当自治体の公務員1人を構成員とし設立された。
- 9) 運営委員会の25人のうち、地元住民が16人で、専門家、行政側、区議会議員の特別委員といった外部者が9人である。
- 10) 甘川村新聞 vol.19 2014年2月発行
- 11) 「沙下区一般現況」<http://m.saha.go.kr/COMMON/FILE/m2.pdf> (最終閲覧日：2014年11月8日)
- 12) KNN モーニングワイドニュース 2014年11月1日付
- 13) 観光客数はガイドマップの販売数に同伴者を3人として乗じたものに、路地祭りの参加者数を加えた合計である (アジアトゥデー 2014年1月3日付)。
- 14) 釜山日報2013年4月9日付
- 15) 国際新聞 2014年7月10日付
- 16) 甘川村新聞 vol.18 2014年1月発行
- 17) 「甘川文化村ブログ (2013.06.05)」<http://cafe.naver.com/gamcheon2/> (最終閲覧日：2014年10月30日)
- 18) 中央日報 2014年7月18日付
- 19) 釜山日報2013年4月9日付、甘川村新聞 vol.8 2013年3月発行、甘川村新聞 vol.10 2013年10月発行
- 20) 冬季 (11月～2月) は午前9時から午後5時までとなる。
- 21) たとえば、世界文化遺産に登録されている岐阜県萩町白川郷合掌造りにおいては、観光客に配布するパンフレットに「合掌造りは火に弱い建物ですので、くわえタバコは厳禁です。集落内はすべて私有地ですので、家屋や庭先へは立ち入らないでください。集落内は保存地区のため道路や水路に柵がありませんので、十分注意して通行ください。集落内にはゴミ箱は設置してありませんので、お持ち帰りにご協力ください」といった注意事項が掲載されている。
- 22) 「甘川住民協議会」のシン・ヨンオク氏へのインタビューによる (2014年10月16日)
- 23) 甘川村新聞 vol.8 2013年3月発行
- 24) 甘川村新聞 vol.26 2014年9月発行  
甘川集落の4,000世帯余に約2,000万ウォン (218.7万円) の予算で実施した。



## 鄭：韓国・釜山市甘川における文化村の展開と観光



写真1 甘川港を見下ろす集落景観 (2014年)  
2014年5月 筆者撮影



写真4 山腹斜面に立ち並ぶ家屋 (2014年)  
2014年11月 筆者撮影



写真2 甘亭小学校からのびるメインストリート (2014年)  
2014年5月 筆者撮影



写真5 空き家プロジェクトのギャラリー (2014年)  
2014年11月 筆者撮影



写真3 魚の形をした矢印 (2014年)  
2014年11月 筆者撮影



写真6 第4回甘川文化村路地祭り (2014年)  
2014年11月 筆者撮影